

続  
とちぎの  
サムライ  
vol.27

全国津々浦々  
**お城めぐりの旅**

防衛上の  
重要拠点  
「対馬」

ここ数年、城址歩きをしていると、さまざまな城と歴史に関わるようになります。毎回のことですが、自分勝手に書いておりますので、史実と異なる部分があるところはお容赦願います。  
(一社)宇都宮建設業協会 木澤喜人

今回は、昔から大陸との文化的・経済的交流の窓口であり、防衛上の重要拠点であった対馬に行ってきました。韓国のプサンまで約50kmのところでした。朝一で自宅を出て羽田から福岡経由で対馬に飛び、レンタカーで金田城登城口に着いたのが16:00でした。それから金田城跡に登ってきました。私は対馬での大きな出来事の中で関心があることが三つあります。①白村江(はくそんこう)の戦い ②元寇 ③文禄・慶長の役です。金田城とも関連するので、①の白村江の戦いから、ザックリと触れていきたいと思います。



大雑把に説明します。6世紀～7世紀の朝鮮半島は高句麗・百済・新羅と三国に分かれていました。隣の中国では唐が国内を統一しました。唐は朝鮮にも進出し、高句麗へ三度も侵攻を重ね征服してしまいました。さらに唐は新羅を属国扱いし、百済を倒して朝鮮半島を取り込もうと計画しました。唐軍に攻められた百済も敗れて滅亡してしま

いました。その後、百済復興運動が展開し、交易のあった倭国(日本)に救援を求めました。そして倭国が663年に参戦しましたが、白村江の戦いで壊滅的な敗北を喫しました。白村江での敗戦を受け、唐・新羅連合軍による日本侵攻を怖れた天智天皇は防衛網の強化に着手しました。

百済帰化人の協力の下、対馬や九州北部の大宰府、瀬戸内海沿いの西日本各地(長門、屋嶋城、岡山など)に朝鮮式古代山城の防衛砦を築き、北部九州沿岸には防人(さきもり)を配備して防衛体制を整備。その一環として、金田城を対朝鮮半島防衛の最前線として築きました。



金田城は、城域約2.2kmを囲んだ朝鮮式山城様式の石塁が見どころです。城の内外を通行するための城戸(城門)が沢ごとに設けられています。水圧による決壊を防ぐための水門です。朝廷は唐と新羅の連合軍が仕返しに襲撃してくるだろうとビビりまくっていましたが、結局、唐の国内で内乱が起きたことで、唐からの攻撃はありませんでした。それから1000年以上の時が過ぎ、忘れられていた金田城は日露戦争開戦に向けて再び要塞として整備され、巨大な砲台が据え付けられました。1350年前に防人が築いた古代山城と、100年前に旧日本陸軍が建設した近代要塞が並存する城山は国の特別史跡に指定され、今もその数奇な歴史を顧みることができる城址です。

次に②の元寇について。中国大陸を征圧した元の皇帝フビライは、日本を属国にするつもりで、1274年の「文永の役」と1281年の「弘安の役」の二度にわたって攻撃してきました。当初、フビライは通商と外交を求め使者を送ってきたのですが、朝廷や鎌倉幕府は無視し続け、四度目の使者には何の返事も与えず追い返し、五度目の使者5人は鎌倉に招いて惨殺してしまいました。いくら何でも国を代表して訪れた国使であります。いかに日本が国際常識に欠けていたか? 幕府にとって日本の一番端の対馬も、中国以外の外国との交易も無関心でした。当然フビライが激怒し来襲してくることは十分予測されることでしたが、徹底抗戦の準備をするはずが、異国警固番役の設置と神社仏閣に対して祈祷要請をただけでした。対馬の宗氏は世界情勢が理解できていましたが、幕府は世界の中の日本をどこまで分かっていたのでしょうか?

ついに元軍3万が襲撃してきた時も、国境防備の最前線である対馬に守備兵わずか80騎、壱岐には100騎という考えられないお粗末な防備でした。さらに、日本の戦い方は、「やあやあ、我こそは」などと名乗り、1対1で戦う戦法。元軍は集団で1人の武士に襲い掛かるという戦法でした。1騎で敵に向かって行き、名乗っている間もなく取り囲まれて殺されてしまいました。武士・島民の男は皆殺しにされ、女は捕虜として敵船の側部に吊られ、島は全滅してしま



いま づ げん こう ぼ り い  
**今津元寇防塁**  
 Imazu Stone Fortifications  
 今津元寇防塁 이마즈 몽고침입 방루터

文永11年(1274年)、元(モンゴル)軍は博多湾に侵入、上陸して豊前守と戦いを繰り返しました。豊前は元軍の高麗軍に備え、九州の御家人に命じて博多湾岸に約20kmにわたる石壁(元寇防塁)を築かせました。石壁は、西は今津から東は豊前まで築かれたのですが、このうち今津地区は約3kmと、最も長い縦壁で残っています。今津地区の石壁の構造は、底幅3m、天端幅2m、高さ3mに石を積み上げ、内側は石や砂で充填するものです。石材には、花崗岩や玄武岩が用いられています。

In 1274 Mongolian forces raided Hakata Bay and came ashore, where shogunate troops engaged them in fierce battle. To guard against a repeat of this attack, the shogunate ordered lower-ranked vassals in Kyushu to build a roughly 20km-long stone wall along the coast of Hakata Bay. This roughly 3km wall in the Imazu area is the longest remaining stretch of the fortifications against the Mongolian invasion.

文永11年(1274年)、元(モンゴル)軍は博多湾に侵入、上陸して豊前守と戦いを繰り返しました。豊前は元軍の高麗軍に備え、九州の御家人に命じて博多湾岸に約20kmにわたる石壁(元寇防塁)を築かせました。石壁は、西は今津から東は豊前まで築かれたのですが、このうち今津地区は約3kmと、最も長い縦壁で残っています。今津地区の石壁の構造は、底幅3m、天端幅2m、高さ3mに石を積み上げ、内側は石や砂で充填するものです。石材には、花崗岩や玄武岩が用いられています。



**今津元寇防塁跡**

今津元寇防塁跡は、文永11年(1274年)に元軍の侵襲に備えて築かれた石壁の遺跡です。現在は約3kmにわたる石壁が残っており、そのうち最も長い部分である今津地区の石壁は、底幅3m、天端幅2m、高さ3mに石を積み上げ、内側は石や砂で充填する構造になっています。

**清水山城**  
 一宮(清水) 11世紀末築城

清水山城は、清水郡(現・佐賀県佐賀市)に位置する山城です。11世紀末に築かれたとされ、その遺構は現在も残っています。山頂には一の丸、中腹には二の丸、東の段丘には三の丸が配置され、それらの曲輪が約500mの縦石垣でつながっています。

**三ノ丸からは厳原市街地・厳原港が一望できます。**

三ノ丸からは、厳原市街地と厳原港が一望できます。清水山城の遺構は、自然の地形を活かして築かれたため、その雄姿は現在もよく残っています。



日本軍全軍の水先案内役として先鋒を務め、戦争後は講和交渉の先頭に立って孤軍奮闘し、時代の流れに翻弄された23歳の若き対馬島主でした。慶長3年(1598年)8月、豊臣秀吉が病死し戦いが終わると紆余曲折を経て、宗氏の努力で再び朝鮮との講和を成功させました。徳川幕府になってからも対馬藩は朝鮮との板挟みとなり、宗氏の苦悩が続きました。派遣されてくる朝鮮通信使を迎える施設として、清水山城の麓に位置する金石城を利用しました。金石城は宗氏の居城でしたが近世城郭に改築し、石垣や堀が廻らされましたが天守は築かれませんでした。現在は木造の二重櫓門が復元されています。



**史跡 金石城跡**

金石城跡は、清水山城の麓に位置する城跡です。16世紀末に築かれたとされ、その遺構は現在も残っています。城跡は、山頂に一の丸、中腹に二の丸、東の段丘に三の丸が配置され、それらの曲輪が約500mの縦石垣でつながっています。

後にその問題が幕府に発覚してしまいました。しかしその時、対馬氏は罪を受けることにはなりません。幕府の朝鮮に対する認識が充分でなかったこと、それにより宗氏が国書の改ざんという手段をとらざるを得なかったことが理由でした。本音は朝鮮との国交・貿易については対馬氏に任せるほかなかったようです。幕府はいざ事が起きると、建前ばかりの強硬論を押し付け、結果が思わしくないときは対馬氏のせいにする。責任感の薄い私からみれば、「こんなことやってられない」と投げ出してしまったでしょう。(何を寝言を言っているのか?)初めからそんな重要な任務がこんな私に来るわけがないか(当たり前!)

最後に「対馬三聖人」の一人といわれる「雨森芳洲」を交渉に当たらせました。芳洲は「誠心外交」を実践し朝鮮交渉の全権大使的な立場で朝鮮と対馬、ひいては日本を良好な状態に戻すことができました。いつの世にも、探せば「優れ者」がちゃ〜んといるもんですね。頓首 (参考) ユーチューブに動画をアップしてあります。

ました。7年後に「弘安の役」で約14万～15万6,989人、軍船4,400艘の軍勢が攻めてくるまでの間に、日本側は博多湾岸に約20kmにも及ぶ石築地(元寇防塁)を築きました。最も頑強な部分で高さ3m、幅2m以上で、元軍は博多湾岸からの上陸を断念しました。日本軍と元軍で一進一退の戦いを続けていましたが、戦闘が始まってから約2か月後の夜中に到来した台風により元軍の軍船の多くが沈没、損壊し兵士が溺死。わずかに残った元軍は急遽撤退し、日本侵略を中止したのでした。日本では、「我が国は神の国で今回も神風が吹いて神様が守ってくれた。困った時でも神がついているので安心だ」と何とそこで一段落してしまいました。井の中の蛙を絵に描いたようでした。

③の文禄・慶長の役に移ります。最初に清水山城を紹介します。豊臣秀吉の朝鮮出兵に際し、唐津の名護屋城と朝鮮半島の釜山を結ぶ輸送・連絡の中継点として、秀吉の命令で対馬に築かれた城です。対馬の海の玄関口である厳原港を見下ろす清水山の尾根に沿って、山頂に一の丸、中腹に二の丸、東の段丘に三の丸を配置し、それらの曲輪が約500mの縦石垣でつながっています。信長・秀吉時代の形式や、朝鮮出兵時に日本の武将が築いた倭城に共通する要素がみられます。朝鮮から撤退後はすぐに廃城となったため、遺構が改変されずに良好に残っています。

山ばかりで耕地が狭い対馬では、生きる糧を得るには朝鮮との交易が欠かせないものでした。対馬の藩主宗家は朝鮮に貢物をして返礼品や米を得ることもありましたが、また、対馬藩は長崎とは別に朝鮮との交易を幕府から認められていました。貿易のための朝鮮への輸出品を長崎から調達し、朝鮮からの輸入品を大阪・京都・江戸に送り利益を上げる中継貿易をしていました。ところが、秀吉が文禄・慶長の役によって朝鮮に侵攻したことで、国交は悪化してしまいました。

対馬の初代藩主・宗義智(よしとし)は、戦時下にあっては日本軍全軍の水先案内役として先鋒を務め、戦争後は講和交渉の先頭に立って孤軍奮闘し、時代の流れに翻弄された23歳の若き対馬島主でした。慶長3年(1598年)8月、豊臣秀吉が病死し戦いが終わると紆余曲折を経て、宗氏の努力で再び朝鮮との講和を成功させました。徳川幕府になってからも対馬藩は朝鮮との板挟みとなり、宗氏の苦悩が続きました。派遣されてくる朝鮮通信使を迎える施設として、清水山城の麓に位置する金石城を利用しました。金石城は宗氏の居城でしたが近世城郭に改築し、石垣や堀が廻らされましたが天守は築かれませんでした。現在は木造の二重櫓門が復元されています。

幕府は、朝鮮に対し高圧的に出れば相手はこちらの言うことを聞くだろうという考え方でした。一方、朝鮮は日本を一段低く見ていたので、日本の無理難題を聞くわけがなく、交渉があるたびに対馬藩は前面に立ち、朝鮮との板挟みになってしまうのでした。ある時の朝鮮使節来日の際には双方の意思の食い違いに困った挙げ句、国書の偽造を行い朝鮮に提出し、その後送られてきた返書にも矛盾がないように偽造せざるを得ませんでした。

